

## — 最終講義 —

## 救急医学と救急医療への挑戦

川崎医科大学救急医学教授 小 濱 啓 次

川崎医科大学に赴任してあつという間に29年が過ぎ去った。振り返って見ると山あり谷ありで、苦労が多かったようにも思うが「苦あれば楽あり」の座右の銘を心に今日まできたように思う。

川崎医科大学における私の仕事は大きく二つに分けることができる。一つは救急医学について、もう一つは救急医療についてである。その前に、私が川崎医科大学に赴任し、今日まで在籍することができた恩師について一言述べたい。

## 1. 恩師に感謝

私は3人の恩師に感謝申し上げたいと思う。最初は、現聖路加国際病院理事長の日野原重明先生である。先生は私が聖路加国際病院でインターンをしていた時に、「人生は一度しかないから自分のしたいことをしなさい。そうすれば仮に失敗しても決して悔やむことはない。」と私に教えてくださった。私が恩師の恩地先生から川崎医科大学に救急部が新設されるそうなので行きませんか、と勧められた時、私に行こうと決心させたのは、日野原先生のこの言葉であった。だから私が川崎医科大学に来たのは、日野原先生のお蔭だと思っている。次は私の直接の恩師である元大阪大学教授の故恩地裕先生である。先生は私に川崎医科大学に行くことを命じられた。また、私に大学の教授は教育、研究、診療において如何にあるべきかを教えて下さった。最後は川崎医科大学の学長、院長をされた故柴田進先生である。先生と私の出会いは

古く、私が聖路加国際病院でのインターンを終わって何科に進もうかなと迷っている時に、日野原先生から「僕の京大の同級生で柴田君というのがいて、臨床病理という基礎と臨床を結ぶ新しい領域をされており非常に面白いので行ってみたら。」と勧められた。私は当時から医師として基礎と臨床の間の仕事をしたいと思っていたので、早速にも、当時山口県立医科大学臨床病理学教室の教授をされていた柴田先生を山口に訪ねた。しかし、その時丁度、山口県立医大が山口大学医学部に移管される時で、私が柴田先生にお会いした時、柴田先生は「先生、誠に残念だが、この教室は山口大学医学部になると同時になくなります。ですから先生の希望は叶えられません。」といわれた。このこともあって私は、奈良県立医科大学の整形外科で実験外科学として切断肢再接着の研究をされていた恩地教授の門を叩くこととなった。前文が少し長くなったが、このような経過から、私は柴田先生に川崎医科大学に赴任以来、ずっと親しくして頂き、また、困ったときは助けて頂いた。救急部開設準備委員会がいきづまり、救急部に定員も付かず、大阪大学から帰ってこいとの指令も出て、私もこれ迄と思った時、救急部に3名の定員を確保して下さったのは柴田先生であった。私が定年まで川崎医科大学に在任できたのは柴田先生のお蔭と思っている。

## 2. 救急医学への挑戦

## 1) 救急医学講座の開講

昭和50年9月、私が川崎医科大学に赴任した

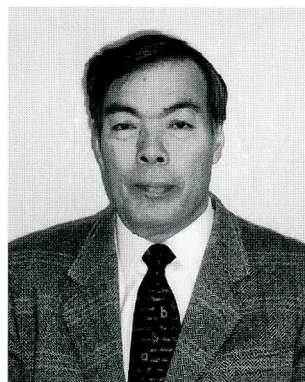






## 略 歴

- 昭和39年 奈良県立医科大学卒業
- 昭和40年 聖路加国際病院インターン修了
- 昭和44年 大阪大学大学院医学研究科修了
- 昭和44年～昭和45年 米国ユタ大学留学
- 昭和45年 兵庫県立西宮病院救急医療センター医長
- 昭和50年 川崎医科大学助教授
- 昭和51年 川崎医科大学教授・救急部部长
- 昭和54年 救命救急センター部長
- 平成6年 高度救命救急センター部長



## 学会活動

- 日本航空医療学会理事長
- 日本救急医療財団副理事長
- 日本救命医療学会理事
- 日本集団災害医学会理事
- 日本交通科学協議会理事
- 日本臨床救急医学会評議員
- 日本外科系連合学会評議員
- 日本脳循環代謝学会評議員
- 日本中毒学会名誉会員
- 日本救急医学会名誉会員
- 日本熱傷学会名誉会員